

＜シンポジウム 15＞特発性正常圧水頭症 (iNPH) : 病態研究最近の進歩

ねらい

座長 山形大学医学部第三内科
 加藤 丈夫
 鎌ヶ谷総合病院千葉神経難病医療センター 湯浅 龍彦

(臨床神経 2010;50:959)

iNPH は、歩行障害、認知症、尿失禁を 3 徴とし、シャント手術により症状の改善が期待できる高齢者の疾患である。シャント手術が有効なことより、脳脊髄液(髄液)の循環動態に異常があることはまちがいないと思われるが、Adams らの最初の報告(1965 年)から 45 年が経過しているが、未だ病因・病態(発症メカニズム)は不明である。iNPH の病因・病態が解明できれば、発症予防や発症後の症状悪化を抑制できる有効な治療法の開発も夢ではない。このような観点から、本シンポジウムでは iNPH の病態に関する最近の研究の進歩に焦点を当てて討論する。最初に、iNPH の症候の特徴や、それが脳のどの部位の障害に由来するのか(局在)について MRI をもちいた研究を紹介し、さらに脳画像診断法の進歩、髄液 tap test の意義についても紹介する。次に、iNPH に関する国内外の疫学研究を概説し、国内の地域在住高齢者を対象にお

こなった脳 MRI 検診の結果を紹介する。そして、地域住民の中には、iNPH に特徴的な脳 MRI 所見を呈しながら神経症状のみとめられない“健常高齢者”がいることを紹介し、それらが iNPH の予備軍となる可能性についても考察する。次に、髄液 flow に関する諸説を紹介し、さらに、造影剤をもちいない新たな髄液動態画像を紹介し、健常者と iNPH 患者での髄液動態の違いを動画をもちいて呈示する。最後に、iNPH の診断に役立つ可能性のある髄液バイオマーカーについて紹介する。これらのバイオマーカーは iNPH で特異的に変動するので、iNPH の病態を生化学的に解明する糸口になる可能性についても考察する。シンポジストによる講演の後に、iNPH の将来展望を参加者と一緒に論じたい。iNPH は高齢化社会において、treatable gait disturbance & preventable dementia として常に念頭におくべき疾患である。